



大好きな場所で

桜区 神田小学校 養護教諭 若林 珠美

「先生はどうして保健室の先生になったの？」

「それはね、先生は小学生の頃から学校が大好きだったからよ」

先日、子どもと話をした時のこと、

「じゃあ普通の学校の先生になればよかったじゃない」

「うん。でもね、学校にいる時具合が悪かったりけがをしたりするでしょう？みんなには大好きな学校で元気に過ごしてもらいたいから、その手助けをしたくて保健室の先生になったの」

私は小児喘息をもった体の弱い子どもだった。入院するほどではなかったが、ひどい時には毎週病院にかかっていた。運動は嫌いではなかったが、頑張りすぎるときまって発作を起こした。だから、はつらつと外で遊ぶ友達がうらやましかった。みんなができることが自分にはできない、そんなはがゆさを感じていた。養護教諭になりたいと思ったのは、自分のこのような経験からかもしれない。私自身が学校が大好きだから、友達が大好きだから、学校で友達と過ごす喜びを子どもたちに感じてほしい。みんなと一緒に元気に勉強したり遊んだりして欲しい。そして、もしちょっと心や体の具合が悪い時は一休みして、また一步踏み出す。そんな時、私はお手伝いをしたい。こんな気持ちが私の根底にある。

保健室には毎日いろんな子どもたちが来る。頭が痛い子、指にとげが刺さった子、な

んとなく遊びに来た子、健康委員の子、心配事を相談しに来た子。3人までならベッドも足りるが、それ以上になることもしばしばである。来室者が多い時、私は千手観音になりたいなあと思うことがある。たくさんの顔と手で鮮やかに速やかに処置ができれば。実際は一つの顔と二つの手を精一杯活用し、子どもたちの訴えに応えるべく奮闘している。

「きのうぶつけたところが青くなったよ」

「それは皮膚の中で血が出ていてね…」

「お腹が痛いよ」

「どの辺？お腹の痛い部分によって原因があってね…」

私はたとえ小さなけがや体調不良の訴えであっても、保健指導のチャンスと考えている。つい掛ける言葉が長く、ちょっと、うっとうしいかな？と自分でも思うくらいである。そのため、ますます一人に掛ける時間が長くなり、反省することとなる。でも翌日「先生、元気になったよ！」と報告しに来してくれる子の笑顔が、本当に嬉しい。そしてまたあれこれと子どもたちに話し掛けてしまうのだ。

憧れだった養護教諭という職に就き、自分の対応に悩む日も少なくない。しかし同僚の先生方に支えられ、子どもたちの笑顔にパワーをもらい、ますますこの仕事が好きになっている。大好きな学校で、大好きな子どもたちと、大好きな仕事をする。その幸せをかみしめ、これからも子どもたちの健康な育ちを支援していきたいと考えている。

(わかばやし たまみ)